青年期の描画特徴と
自己愛性・依存性・共感性についての研究
――動的家族画と尺度との関連――

村　井　千　哲

本研究では、青年期を対象に自己愛性・依存性・共感性という観点から動的家族画との関連について検討を行った。調査用紙は、自己愛人格目録短縮版（NPI-S）、依存の自己評定尺度、共感性尺度（FDES）、の尺度と動的家族画（KFD）により構成されている。

NPI-S と依存の自己評定尺度において人物像の一部を抹消する者に有意な差が示された。このことから、他者よりも優れていると感じており、有能であるなどの強い自己肯定感との関連や、誰かに依存したい、常に不安を抱えているなどといった不安定さが伺えた。考えられる要因の一つとして、青年期特有の自信の無さや将来に対する不安・葛藤といった要因が考えられる。本研究で用いた NPI-S で扱われる自己愛性は、誇大性の自己愛の特徴と一致すると考えられ、青年期の自己愛に関してさらに研究を深めていくには、過敏性を含めた検討を行う必要があると考える。また自己愛傾向について、性別と年齢の検討を行った結果、男性の青年期は、人生の中で最も自己愛傾向が増加する傾向にあり、他者を意識し、外見の良さを重視する傾向にあることが伺える。依存性について、性別と年齢の検討を行った結果、青年期は親密な関係を重視する傾向にあり、大学生となりさらに学年が上がっていくにつれ、多くの人が依存対象を友人から恋愛へと移行すると考えるならば、成人は未成年より統合された依存傾向が低くなるということも考えられる。

共感性について、先行研究の結果とは一致しなかった。考えられる要因として、友人関係への満足度や他者の気持ちを共有するといった共感の低さが考えられる。次に「自己像の位置」については自己像を中央に描く者は、左下に描く者と比べて依存欲求が高いということが示された。自己を中央に描くことは自己を肯定的に受け入れ、安定した対人関係を形成しているものと推察される。また、共感性について、未成年・成人ともに男性は女性より肯定的な感情を共有する傾向にあることが示された。共感は親密に交流し合うことによって生じやすくなる一方で、仲間との対立はきょうだい以上に強い影響を与えると述べている。このことからも友人からの影響は大きい。しかし青年は友人と適応な距離が分からず、関係性が希薄となっていることから、相手の肯定的感情の共有経験が低くなっているのではないだろうか。